

ただ、14年産ビートは5年ぶりに糖度が16%を超える16.6%となり、「小麦の不作をビートに助けられた」という農家もいた。近年、比較的省力栽培できる小麦の面積が増えていたが、不作続きもあり、今年は小麦に代えてビートを増やした生産者も多い。

農家の労働負担軽減を目的に、生育のリスクはあるも

のの苗を移植せず、直接畑に種をまく直播（ちよくはん）が広がっていることも面積増の要因の1つ。

近年はビートが減ったことで輪作体系が崩れ、連作による病害なども課題に。日本甜菜製糖芽室製糖所は「農業改良普及センターなど関係者が輪作を保とうと努力した成果も出たのでは」としている。

農業ガイド1017号 ビート萎黄病対策急ぐ

2015年7月18日

昨年、十勝で多発したビートの西部萎黄（いおう）病に対し、関連機関が連携して対策を進めている。道農協畑作・青果対策本部は2016年度の政府予算概算要求への政策提言で、同病の感染源に対応するため農業の登録取得までの期間短縮を提言する。製糖事業者や北海道農業研究センター、十勝農業試験場（芽室町）も原因究明や対策の研究を続けている。

農業登録の期間短縮を提言

西部萎黄病はビートの葉が黄色に変色し、光合成ができなくなって糖度が上がらなくなる病害。モモアカアブラムシなどによって媒介されるウイルスが原因となる。

昭和40年代にオホーツク、1990年前後に胆振、2008年には十勝など、これまでも多発した年があった。昨年は十勝管内で多く発生し、ビートの糖度が全道平均17.2%に対し、十勝は16.6%と低くなった。

西部萎黄病はウイルスそのものを取り除くことができないため、媒介するアブラムシを防除することしかできない。北海道てん菜協会（札幌）は昨年11月に続いて今年2月にも農家や関係機関にチラシを配布し、アブラムシの越冬環境となるビニールハウス内のクリーニングなど、防除徹底を求めた。

道農協畑作・青果対策本部の政策提言では、西部萎黄

病や薬剤耐性のある褐斑病への対応として、農業の登録取得までの期間短縮を盛り込んだ。現在、薬剤を新たな作物で登録する場合、薬剤被害や作物残留などの検査で最短で4～5年程度かかっており、期間の短縮を求めている。

日本甜菜製糖芽室製糖所によると、今年の西部萎黄病の初発は、昨年とほぼ同時期となっており、今後8月にかけてどの程度広がるか注視していくという。

同製糖所の斎藤英俊農技開発部長は「アブラムシに使える薬剤はネオニコチノイド系の1系統しかなく、新しい薬剤を待望している。実用化手前や試験中のものもあり、登録までの期間が短縮されればありがたい」と話している。

十勝農業試験場など各研究機関も、道てん菜協会からの委託で13～15年度に多発要因の解明と被害低減対策の研究を進めており、今後の成果が期待されている。

ジャガイモシロシストセンチュウ 網走で国内初の確認

2015年8月20日



網走市内で発見された、ジャガイモの根に着生しているシロシスト（直径約0.6ミリ）（農研機構北海道農業研究センター提供）

【札幌】農林水産省と道は19日、網走市内のジャガイモ畑で、植物防疫法に基づく重要病害虫のジャガイモシロシストセンチュウを国内で初めて確認したと発表した。寄生されたジャガイモは根の生育が阻害されて枯死し、収穫量が著しく低下する。

人畜には無害で附着したジャガイモを食べても健康被害はない。

ジャガイモシロシストセンチュウは欧米などが主な発生地域。既に道内で確認されているジャガイモシロシストセンチュウと類似するが、シロシストセンチュウの抵抗性品種が通用しないという。

道によると、7月下旬に同市内の生産者からジャガイモの生育不良の指摘があり、同30日に根に附着したシロシスト（包のう）を発見。今月、農研機構北海道農業研究センター（札幌）、農水省植物防疫所（横浜）が、ジャガイモシロシストセンチュウと同定した。

19日現在、この農場以外に同様の照会は寄せられていないが、農水省が発生範囲の特定を進めている。

十勝警戒、対策を徹底

ジャガイモシロシストセンチュウの発生が国内で初めて確認されたことを受け、十勝管内の生産者や農業関係者は冷静に受け止めつつも、驚きと警戒感を強めている。

豊頃町の農家（45）は「まだ情報を知ったばかりなのでよく分からない。種イモを生産しているので怖い」と話す。十勝の生産者の間でもジャガイモシロシストセンチュウはよく知られているが、「シロシストセンチュウは「初めて知った」という声が多い。